Architectureの訳語をめぐって

鄭英淑*
ohayochung@ks.kyorin-u.ac.jp

<目次>

1. はじめに
2. architectureの意味
3. architecture概念の移入
3.1 近世に於けるarchitectureの理解
3.2 江戸末期における architectureの訳語
4. 明治初期におけるarchitectureの訳語
4.1 教育機関の設立
4.2 工学字彙における訳語
4.3 百科全書における訳語
4.4 対訳辞書における訳語
4.5 英語学習書における訳語
4.6 個人著作・論文における訳語
4.7 新聞における訳語
5. 明治中期以降における architectureの訳語
5.1 教育機関の設立
5.2 工学字彙における訳語
5.3 対訳辞書における訳語
5.4 新聞における訳語
5.5 国語辞書における訳語
6. 結論

主題語: 西洋建築(western construction)、建築学(architecture)、造家術(architecture)、英和対訳袖珍辞書(A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language)、仏語明要(Hutsugomeiyo)

1. はじめに

幕末に開国して以来、日本は多方面で西洋の新しい技術、物事、思想、それに風習、習慣までも移入した。建築においても、それまでの伝統的な木造家屋とは材料、技術、建築様式や建築観などで大きく異なる西洋建築を移入したが、その中でarchitectureという概念も移入されたのである。　英語architectureは、1862年の『英和対訳袖珍辞書』に「建築学」と訳されており、1864年の『仏語明要』の中では「造家術」と訳された。その他にも「造築」「築造」「営造」「造営」など、別の訳語も存在していた。明治10年代に入ると、幕末期の種々の造語は淘汰され、「建築」と「造家」に絞られていく。今はarchitecture＝建築であるが、作られた当時はすぐに一般化されずに同時に作られた「造家」の方が使われた。実際東京帝国大学には「造家学科」があったし、「造家学会」もあった。

* 日本 杏林大學 外國語學部 准教授

architectureというのは、材料、技術、様式(style)、建築観などを統括する概念として、日本にはなかった抽象概念であったから、なかなかその本質が理解されず、いくつもの言葉が使われており、最後は「建築」に決まったのである。しかしarchitectureが「建築」に決まったことにより、西洋の「近代数学のアキーテクト」(大数学者を褒めた比喩)や「国家のアキーテクト」(大政治家)といった時のarchitectの意味は表わせなくなり、「アキーテクト」になぞらえられるのである。

本研究は、このarchitectureの概念に注目して、それが幕末・明治期にどのように受容されたかを、それにあてられた訳語を中心に見ていこうとするものである。

具体的には、辞書、新聞、建築や美術関連雑誌・著書・用語集、個人著作などの文献からそれまでに触れたことのない概念を、どのような言葉に訳していったのかを調べて、architectureの概念がどう受容されたかを見ていく。

2．architectureの意味

architectureは、「archi」と「tecture」の合成でなされたことばで、古代ギリシャ語「アルキテクトニケ(architectonice)」から出発した。1) 古代ギリシャ語で「アルキ」は、ものごとの原理の意味を持ち、「テクネ」は諸芸の意味を持つ。古代から中世にかけて、諸芸を統括する場は建物であった。因ってarchitectureは芸術性も技術性も同時に持つ抽象的概念なのである。当時の英語辞書では、achitectureは art of buildingとしていた。2) ヨーロッパから流入された当時、日本にはなかった概念であった。

3．architecture概念の移入

3.1 近世に於けるarchitectureの理解

日本の近世段階において、建造物を表わす用語には、住宅建造物(武家・町人・百姓層の

1) 古代ギリシャ語architectoniceは、architecturaは同意語である。
2) 菊池重朗(1961)「明治初期におけるARCHITECTUREの訳語について(続)」『日本建築学会論文報告集』第67号

住居)を包括する用語として「家屋」「家作」があったが、「建築」のように寺社系と住宅系の建造物類型を横断的に含む抽象的な概念は欠如していた。

建造物を呼称する場合、門・堂・塔・社・御殿・長屋など、通常は用途・形態別の類型名称が用いられていたのである。[3)]

包括的概念が欠如していた建造物に対して、建設行為を表わす用語には「作事」「普請」「家作」「建家」「造営」「構造」などが使われていた。これらの用語の中、「作事」「普請」は、幕府の建設組織の名称、「作事方」「普請方」「小普請方」に使われたものであり、「造営」「構造」などは、明治期にarchitectureの訳語として用いられた。[4)] 当時日本にはまだ新しい西洋の学問や技術が移入していない。

しかし、1542年のポールトガル人による鉄砲伝来、1549年スペイン人宣教師フランシスコ・シャウィエルのキリスト教の布教により西洋が日本に知られるようになる。彼らは布教のために対訳辞書を編纂するが、最古のものが文禄4年(1595)の『羅葡日対訳辞書』である。

以降は鎖国に入り、長崎を唯一の門戸として和蘭との通商のみが認められる。長崎商館員及び蘭通詞を通じ蘭学が学習され始め、蘭和辞書もいくつか発刊される。H.Halmaの『蘭仏辞書』を基にした『法留麻和解』(1796)『訳鍵』(1810)『道訳法留馬』(1833)『増補改正訳健』(1857)『和蘭字彙』(1853~1858)がこれに当たる。上記の辞書にarchitectureに当たる語がどう訳されているのかを調べて、当時architecture概念がどのように記述されたのかを見る。

日本最古の欧和対訳辞書である『羅葡日対訳辞書』(1595)にarchitectureと他の語とともにみると、以下のようである。(Lus.は葡語の略、　Iap.は日本語の略)

architectonice, es. Lus. Arts de edificar. Iap.Sumicaneno gacumon
architectura, ae. Idem
architector, aris. Lus. Edificar, fabricar. Iap. Iyeuo tatcura, conriu suru
architectus, i. Lus. Architecto, ou meltre das obras.Iap. Daicu, sodaicu, daicuno torio

architectureの語源になる architectoniceと、architecturaは「すみかねのがくもん(墨曲の学問)」

3) 金行信輔、倉方俊輔、清水重敦、山崎幹泰(1997.8)「「造家」から「建築」へ」―学命名・改名の顛末から―」『建築雑誌』112号
4) 「家作」「建家」は、建造物としての家屋に用いられた。建造物を表わす「建物」もあったが、用例は稀である。(金行信輔、倉方俊輔、清水重敦、山崎幹泰、「「造家」から「建築」へ」―学命名・改名の顛末から―、『建築雑誌』112号、1997.8)

と訳されている。葡語はarts de edificarになっている。これからも分かるように当時宣教師や彼らを手伝って辞書を作っていた日本人はこの単語を「建物」や「家を建てる」ではなく「家を建てるための基礎的なもの」として理解していたことが分かる。しかしキリスト教の禁圧、さらに鎖国によってこの辞書はあまり利用されなかったと考えられる。以降長崎を唯一の門戸として和蘭との通商のみが認められる。これによって長崎和蘭商館員や蘭通詞を通じ蘭語が学習され始め、 蘭和辞書もいくつか発刊される。H.Halmaの『蘭仏辞書』(1781)を基にした『法留麻和解』(1796)『訳鍵』(1810)『道訳法留馬』(1833)『増補改正訳健』(1857)『和蘭字彙』(1853~1858)がこれに当たる。上記の辞書にarchitectureに当たる言葉がどう訳されているのかを調べて、当時architectureの概念がどのように理解されたのかを見る。

まず、 H.Halma の『蘭仏辞書』及び『仏蘭辞書』に仏語architectureは蘭語bouwkunde、bouwkunstと訳されており、architectureと関連がある、石(石垣)などで築くの意味の仏語maconnerは蘭語metzelenと訳されている。それ故、この単語を中心にarchitectureについて考察することにする。5)

＜表 1＞ 蘭和辞書訳語比較

見出し語	訳鍵 (1810)	道訳法留馬 (1833)	増補改正訳鍵 (1857)	和蘭辞彙 (1855~1858)
bouwkunst	造作ノ術。 営構ノ術	家建ル術 (bouwkonst, bouwkunde)	家ヲ建術	家建ル (bouwkonst, bouwkunde)
Metzelen	壁ヲ塗ル	築建。 ネリ塀石垣ナドヲ	壁ヲ塗ル。 築建ル。	築建ル練塀石垣杯ヲ

architectureの意味を表すbouwkunst、bouwkonst 、bouwkundeは「造作ノ術」「家建ル術」と訳されている。以前と同じように「家を建てる技術や基礎的なもの」として理解していることが分かる。まだ熟語にはなっていない。一方、石や石垣で塀を造るの行為を表すmetzelenは「築建」「築建ル」と訳されている。築と建とが統合されるに至り、「築建」は技術的動作を示すものとして統一されたのである。この「築建」が将来の抽象概念を表す「建築」に発展する一要因になると考えられる。

5) 菊池重郎「近世におけるARCHITECTUREの訳語について」『日本建築学会論文報告集』第50号、昭和33年を参考にしたものである。

3.2 江戸末期における architectureの訳語

江戸末期になり、開港してからは英和辞書・英仏辞書が作られるが、これらは蘭人や蘭学を学んだ人々によって編纂されたものである。当然以前の和蘭語辞書が参考されたことは想像できる。文久2年(1862)に蘭通詞堀辰之助により『袖珍英和対訳辞書』が刊行され、ここにarchitectureは「建築学」と、architectは「建築術ノ学者」と訳されている。この『袖珍英和対訳辞書』は、H.Picardの『 New Pocket Dictionary Of the English　and Dutch Language』を基にして編纂されたもので、 architecture はここのbouwkunst(bouwkonst,bouwkunde) と、metzelenの上に成立したと考えられる。すなわち、蘭学者による「家を建ル術」「築建」が英学時代になって「建築学」に変わったのである。以前の蘭学の蓄積から発生できたことと見られる。

一方、幕末には英学と前後して仏語も学習され仏和辞書も刊行される。1864年刊行された村上英俊の『仏語明要』が日本最初の仏和対訳辞書である。ここでarchitectureは「造家術」と訳されている。すでに蘭学時代に蘭仏辞書及び仏蘭辞書が刊行され、これらの訳語が基盤となったと考えられる。たとえば、『訳鍵』(1810)と『増補改正訳鍵』(1857)で仏語construere、batirは蘭語 bouwenと訳されて、日本語訳は「家ヲ作ル」となっている。さらに、『訳鍵』(1810)には、仏語architectureに当たる bouwkunst (bouwkonst,bouwkunde)は「造作ノ術」と訳されている。

これらの辞書には　英華辞書の影響も考えられるが、1866年のW.Lobscheidの『英華字典』にarchitectureは、「the art of building, 工匠務、造宮之法、起造之法」とあって、「建築」はない。1884年版には「建造法」が追加されている。これは「建築」の建と、「造家術」の造の組み合わせになっている。日本の影響ではないかと考えられる部分である。6)

『袖珍英和対訳辞書』の「建築学」も『仏語明要』の「造家術」も蘭学時代の蘭和辞書が土台になっていることが分かる。幕末以降の西洋建築導入期に登場した「建築学」や「造家術」は既存の単語をそのまま使わずに新たな組み合わせにして熟語にしたものである。architectureを単に「家を建てる」とか「家を作る」とは異なる理解をしていたと考えられる。

もちろん既存の語をそのまま用いたものもある。幕末に刊行された英語学習書の一種である『対訳名物図編』(慶応3)と、『英仏単語編注解』(慶応3)にarchitectureはそれぞれ「 匠長　タウリヤウ」と、「 棟梁匠長　トウリヤウ(大工ノ)」と訳されている。しかし、西洋建築　導入と発展に従って、既存の用語より新しく作られた「建築学」「造家術」が広がるようになる。

---

6) 中国の古典に‘建築’は出ているが、その意味は‘建てて築く’という動詞としての意味である。この動詞としての‘建築’が日本人によって architectureの訳語 ‘建築’になったのではないかと思われる。

＜表2＞ 英和・仏和辞書及び英語学習書訳語の比較

	architecture
『袖珍英和対訳辞書』(1862)	建築学
『仏語明要』(1864)	造家術
『対訳名物図編』(1866)	匠長　タウリヤウ
『英仏単語編注解』(1866)	棟梁匠長　トウリヤウ(大工ノ)

4. 明治初期におけるarchitectureの訳語

日本における建築の近代化は高等教育機関の設立と、西洋からの建築家、建築技術家の招聘に始まった。イギリス人ウォートルス(T.J.Waters)やアメリカ人ブリジェンス(R.P.Brigens)という建築技術者による技術移植過程を経て、明治10年イギリスから建築家コンドル(Josiah　Conder)が来日、同年工学寮(明治4年、工部省内に設立。明治6年、最初の入校生受け入れ)から改称された工部大学校の教授に主任して、近代化の体制が整い始めるのである。その中で新たな技術体系を表現するための翻訳語が必要となった。architectureという概念もこの時期において新しくかつ重要なものの一つであった。

明治以前からarchitectureは多数の言葉で訳されており、明治直前には「建築学」「造家術」なども用いられていた。明治初期には西洋知識の吸収に積極であり、多数の著訳書・対訳辞書・外国語学習書の刊行が盛んであり、教育機関も設けられた。ここではこれらの刊行物にarchitectureがどう訳されていたのか、また教育機関の名称としてどう呼ばれていたのかを考察してみる。

4.1 教育機関の設立

明治政府は西洋建築の導入と邦人建築家の養成のため、教育機関設立を推進し、明治4年に工学寮を設立し、明治6年には最初の入校生を受け入れた。明治10年に工部大学校と改称されて、明治12年には最初の卒業生も出た。工部大学校関連資料から工学関連学科にどのようなものがあるかを調べて、architectureにどのような訳語が与えられたのかを見ることにする。

工部大学校学課並諸規則(工部省、 第6号、明治6)

第七　在寮中授業ノ学課左ノ如シ

第一　シビルエンジニール

第二　メカニカルエンジニール

第三　伝信術

第四　**建築学**

工部大学校学課並諸規則(工部省、布達、第六号、明治7)

第十二條　寮中ニ於テ教授スヘキ所諸術学課左ノ如シ

一　シビルエンジニール

二　メカニカルエンジニール

三　伝信

四　**造家術**

工部大学校学課並諸規則(工部省、明治8)

原書『IMPERIAL COLLEGE OF ENGINEERING』の目次にあるARCHITECTUREが「**造家学**」と訳しており、諸術学科紹介にも「造家学」となっいている。しかし、第十七章　工術試験局の第五節には「**建築**」も出ている。以下のようである

第十七章　工術試験局

第五節　又局中ニ於テ一組ノ機関ヲ設ケ**建築**ニ用フベキ各種物料ノ堅脆ヲ験セントシ本邦所産ノ樹木見本ノ捜集ニ従事ス。

工部大学校学課並諸規則(工部省、明治11)

教師名氏の所に

造家学　ヂョサイア、コンドル　となっている。

第六章　専門学

各生徒志願ノ一科ヲ研究スル為ニ専門学ニ入ル

丁　**造家学**

一.　測量学

二.　物品堅脆

三.　地質学

四.　**造家学**

五.　図学

六.　畫学

巳　鉱山学

一.　地質学

二.　鉱物学

・

・

六.　**建築**大意

工部大学校学課並諸規則(工部省、明治17)

教師名氏の所に

造家学　　ヂョサイア、コンドル　となっている。

工部大学校学課並諸規則(工部省、明治18)

教師名氏の所に

造家学　　工学士　辰野金吾　となっている。

第十章　図学教場

第七節

造家学科ニ属スル図学教場に於テハ**造家**諸式ノ模型及ヒ各種**建築**ノ図式額面ヲ備フ

工部大学校の学課名として「建築学」「造家術」「造家学」がともに使われているが、ほとんど「造家学」が使われている。また、明治18年の諸規則の用例文を見ると、造家と、建築は夫々異なった意味を含んでいることが分かる。造家は、各種建築物のみでなく他にその建築物をもっと芸術的に飾る何かも指す用語として、建築は建設用の建造物を指しているのではないかと考えられる。

4.2 工学字彙における訳語

明治9年(1876)に工学字彙(野村龍太郎、下山秀久編)が刊行されるが、architecture関連用語が次のように訳されている。

Architect	造営師
Architecture	**造営学。造営術**

Gothic Architecture	ゴス派 造営術
Mediaeval Architecture	中古造営術
Navel Architecture	造船学

造営術、造営学が用いられているが、この造営は近世時代の建設行為を表すことばであった。既存のことばを用いて訳語にしたものである。現在の建築士に当たる語として造営師も登場している。

明治19年版には、以下のようである。7)

Architect	造営師
Architecture	**造営学。造営術**
Gothic Architecture	ゴス派 造営術
Mediaeval Architecture	中古造営術
Navel Architecture	造船学
Builder	建築者、造営者
Building	家屋
Building materal	建築材料
Construction	構造、築造

建築はbuildの訳語に与えられていることが分かる。

4.3 百科全書における訳語

文部省は明治6年に百科全書(*Information for people*を翻訳出版したもの)第一分冊「百工応工化学篇」を訳出刊行し、明治15年に「建築学」が刊行された。この書名は原書の一篇の篇名Architecture を訳したものである。しかし、文部省は百科全書刊行企画当時、既刊未刊を問わず各分冊の篇名すなわち書名を各巻末に表記してある。百科全書「建築学」は明治15年の刊行であるが、すでに明治6年百科全書企画当時に篇名を建築学としている。

明治6年刊行の「教導説」巻末の「百科全書篇名」に次のように各篇名が書いてある。

7) 片野　博(2002.4)「品質概念からみた用語「建築」「造家」の相違」『日本建築学会計画系論文集』第554号

星学　二冊　地質学　二冊　気中現象学　二冊

・
・
・

水運篇　二冊　**建築学**　二冊

4.4 対訳辞書における訳語

明治20年頃までの明治初期に刊行された対訳辞書にarchitectureがどう訳されたのかを見る。

＜表3＞　英和辞書訳語の比較

刊年	編者	書名	原語(architecture)
明治5(1872)	ヘボン	和英語林集成再版	Chiku-zō-jutsu
明治6(1873)	柴田昌吉 子安　峻	附音挿図英和字彙	造営学
明治9(1876)	ERNEST MASON SATOW,B.A ISHIBASHI MASAKATA	AN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY OF The Spoken Language	yadzukuri,zōka-gaku
明治12(1879)	ERNEST MASON SATOW,B.A ISHIBASHI MASAKATA	AN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY OF The Spoken Language2版	yadzukuri,zōka-gaku, kenchiku-gaku
明治15(1882)	柴田昌吉 子安　峻	増補訂正英和字彙2版	造営学、建築術
明治19(1886)	ヘボン	和英語林集成3版	Kenchiku-jutsu, Zōyei
明治19(1886)	P.ANuttall 棚橋一郎	英和双解字典	造営学。建築術
明治19(1886)	斯維爾士維廉士著 柳沢信大校正・訓点	英華字彙	建造法
明治19(1886)	斉藤恒太郎	龠稿訳英文熟語叢	Military architecture 築城法 Navel architecture 造船術

明治初期英和辞書には、architectureの訳語に建築学(術)、造家学、造営(学)、築造術などが当てられている。近世時期の語を利用したもの(造営(学))、新しく作られたもの(建築学、造家学、築造、建造法)がともに使われている。明治15年からは造家学(術)の見出しはない。『英和字彙』の場合、初版では造営学のみだったが、2版では建築術が追加されて、『和英語林集成』においても築造術が建築術に変わった。明治初期後半になるにしたがって建築学(術)と、造営学に絞られていく。

4.5 英語学習書における訳語

万延元(1860)年に英学の講習が始まって以来、次々と英語単語集、文法書、会話書が刊行されていく。1866年には『英語階梯』『英語訓蒙』『英吉利単語篇』という一連の英語教科書が出版されている。この内、『英吉利単語篇』については、最初の訳語集『英仏単語編注解』をはじめ、約10種類の訳語集が刊行された。

ここでは、これらの訳語集にarchitectureがどう訳されているのかを、見る。

＜表4＞　英語学習書の訳語比較

刊行年	訳語集	architectureの訳語
慶応3	英仏単語編注解	棟梁匠長　トウリヤウ(大工ノ)
慶応3	対訳名物図編	匠長　タウリヤウ
慶応4	英仏単語便覧	棟梁　トウリヤウ(大工ノ)
明治4	英吉利単語篇増訳	棟梁匠長　トウリヨ(大工ノ)
明治4	通俗英吉利単語篇	棟梁　トウリヤウ(大工ノ)
明治4	独逸訳附単語篇	棟梁(トウリヤウ)大工ノ
明治4.6月	通俗仏蘭西単語篇	棟梁(トウリヤウ)大工ノ
明治4.11月	独逸単語篇和解	棟梁(トウリヤウ)
明治7	英国単語図解(下)	匠長　タウリヤウ

当時教科書に使われていたこれらの訳語集には、新しく作られた建築術(学)や造家術(学)、造営学(術)ではなく、殆どが近世のことばをそのまま使っていることが分かる。

4.6 個人著作・論文における訳語

明治期を通して社会的に影響力のあった人たち主に洋学者たちの著書や論文、そして影響があったと思われる本にarchitectureはどう訳されていたのか、を調べる。

－　西周の「五原新半範」(1870~1873)

西洋ニテ現今美術ノ中ニ数フルハ画学(ペインチング)、彫像術(スカルプチュール)、彫刻術(エングレーキング)、**工匠術**(アルキテクト)ナレト、猶是ニ詩歌(ポエト)、散文(リテラチュール)、音楽(ミジウク)、又漢士ニテハ書モ此類ニテ皆美妙学ノ元理ノ適当スル者トシ、

－　西周の「文武学校基本并規則書」(1870)

一　**築造科**将校科目左之通

高等代数学 高等幾何学	微分	積分
野堡砲臺築造法(ヘルドフルシカソシンク)	橋(ポントン)　船(ニュール)　架(スキュン)　法(スト)	永久城郭(ゼニュー)**建築法**
	地雷火	水雷火
築造操練		

－　西村茂樹の『泰西史鑑　中編巻之七』(1876)

〇詩学ニ次デ盛ンニ興リシハ**建築術**ニシテ、第十三世ノ中葉ニ於テ既ニ最高ノ地位ニ進メリ、草木ノ花葉又ハ動物ノ像ヲ彫鏤セルヲ峩特(ゴート)ノ**建築術**ト云フ、

〇当時ノ**建築**ノ大家ノ中ニ於テ巴丁(バーデン)ノ耶爾尹(エルウイン)最(もっとも)世ニ名ヲ知ラル、

－　ペートル・パーレー(巴来)著、牧山耕平訳、『万国史・上』(1876)

第五十三章欧羅巴

ヘリクルス壮太美麗ノ**建築**ノ為シテ市府ヲ修飾シ文学、詞作及ヒ神廟、偶像、図画等ノ諸芸術ヲ開キシコトハ

－　ウィリアム・スウィントン著、藤田治明訳述、『万国史直訳』(1887)

両方ノ人民ガ驚クベキ**建築**ノ性質ヲ顕ハシ而メ埃及ノ国語ガ元来ノせみっとノ種類デアルベク其故ニ

近代ノ学生ハ其等ノ**建築物**ガ第四朝ノ中間ヨリハ尚遅カラヌ時ニ於テ起サレデアリシコトヲ同意シテアリシ

此ラガ金字塔**建築者**ノ時期デアリシ故ニ

－　森有礼、「開花第一話」(1874、明六雑誌3号)

邦俗稍此ニ臨テ能ク器械ヲ製シ**造営**ヲ興シ鉱山ヲ穿チ船艦ヲ造リ

－　津田真道、「想像論」(1874、明六雑誌13号)

想像記憶ト異ナリ　～　想像ハ未ダ曾テ経歴セザル所ノ事ヲ新ニ**結構造営スル**ナリ

－　神田孝平、「国楽ヲ振興スベキノ説」(1874、明六雑誌18号)

賦金又ハ有志ノ寄付金等ヲ以テ都会ノ地ゴトニ壮麗宏雄ナル公堂**ヲ建築シ**衆庶公楽ノ処トナシ

－　津田真道、「貿易権衡論」(1874、明六雑誌26号)

諸省府県**建築**ノ業石橋大路瓦斯燈ノ設陸続トシテ作リ

－　森有礼、「明六社第一年回役員改選ニ付演説」(1875、明六雑誌30号)

所得ノ最大ナルハ之ヲ以テ我社ノ会館建築ノ用ニ充ルニ如クハ無シ

会館建築ノ金主ヘハ利子毎月幾十圓[建築費額ノ一割]ヲ出スコトヲ約スヘシ

－　神田孝平、「貨幣病根治療録」(1875、明六雑誌33号)

正金ノ外出ヲ止メント欲スル時ハ　～　鉄道電信ノ**建築**ナリ鉱山工局ノ開業ナリ～

－　神田孝平、「鉄山ヲ開クヘキ議」(1875、明六雑誌37号)

鉄山開業ノ命ハ慥カ先般下タリタルカト覚ユ多分方今**建築**最中ナラント果シテ

－　西村茂樹、「転換説」(1875、明六雑誌43号)

道路橋梁警察治水堤防ノ諸費ヲ民間ヨリ出サザルベカラズ学校**建築**保持ノ法ヲ立テ

ほとんど、「建築」が使われている。建造物を表すときは「建築物」を、建設するの意味は「建築する」をと、区分して用いられている傾向が見られる。さらに「建築者」、「建築費」等も出ていり。すなわち、この接尾語によって具体的な意味が付加されるようになる。他に、「工匠術、築造法(術)」も使われているが「造家術」は見つからない。

4.7 新聞における訳語

『新聞集成明治編年史』の索引から建築関連ことばを検索した結果、明治20年までに1件の四例が見つかった。

－　新聞雑誌190、明治7＝1874. 1月
　　建築局出張所で
　　府下深川清住町建築局出張所ニ於テ、日頃「セメント」ヲ製セリ

「建築局」という建築関連部署も出来たことは、当時「建築」は一般的に広く使われていた証拠になると思われる。

5. 明治中期以降における architectureの訳語

明治12年(1879)には工部大学校造家学科から4人の卒業生が輩出され、この内辰野金吾はヨーロッパ留学を経て明治17年(1884)工部大学校教授に就任する。2年後(1886)には造家学会も設立され、日本人建築家による建築の近代化が進められていく。雑誌も刊行するが、雑誌名は建築雑誌とし、明治30年(1897)には学会名も建築学会に改名する。同年、東京大学の造家学科も建築学科と改名される。以降建築の語は広く流通していく。

5.1 教育機関の設立

明治20年(1887)に中等・実業教育機関として工手学校が設立され、21年(1888)に第一期生が入学し、22年(1889)に工手学校造家学科第一期生19人が卒業する。明治27年(1894)には実

業参考書『建築学講義録』(滝大吉　著)も刊行され、37年(1904)には木工教育教科書『工業学校建築製図教授要目』が出版される。一方、明治33年(1900)には雑誌『建築』(浪和会)が創刊され、明治40年(1907)には『建築世界』(建築世界社)が創刊される。[8)]

教育機関の名前には、造家ということばが使われているが、他では建築ということばが使われていることが分かる。

5.2 工学字彙における訳語

明治21年(1888)と、27年(1894)の訳語を見る。

－ 明治21年『工学字彙』

Architect	造営師
Architecture	**造営学。造営術**
Gothic Architecture	ゴス派 造営術
Mediaeval Architecture	中古造営術
Navel Architecture	造船学

－ 明治27年『工学字彙』

Architect	造営師、造家師
Navel architect	造船師
Architecture	**造営学。造営術。造家学**
Gothic Architecture	ゴス派 造営術
Mediaeval Architecture	中古造営術
Navel Architecture	造船学

以前の『工学字彙』には、「造営」が利用されていたが、ここには造営以外にも「造家」も用いていることが分かる。

5.3 対訳辞書における訳語

この時期の対訳辞書にarchitectureがどう訳されているのかを見る。

8) 金行信輔外4人(1997.8)「「造家」から「建築」へ」『建築雑誌』112

＜表5＞　英和辞書訳語の比較

刊年	編者	書名	原語(architecture)
明治21 (1888)	イーストレーキ・棚橋一郎	ウェブスター氏新刊大辞書和訳字彙	造営学、建築学
明治21 (1888)	島田　豊	附音挿図　和訳英字彙	建築術、建築学；構造、規模、結構 Military architecture　築城術 Navel architecture　造船術
明治22 (1889)	尺　振八　訳	明治英和字典	建築術、建築学〇造構。工。 Military architecture　築城術 Navel architecture　造船術

造営学と、建築学(術)が使われている。他には、近世から使われていたことばが用いられていることが分かる。

5.4 新聞における訳語

『新聞集成明治編年史』の索引から建築関連ことばを検索した結果、以下のような用例が得られた。

－　明治35(1902)、一・十七、読売
　伊東工学博士　工学博士伊東忠太氏は東亜の建築研究の為文部省留学生として遠からず、 ~

－　明治43(1910)、四・二、東京日日
　著作権法條約
　一、建築意匠を著作権と認むる事

－　明治44(1911)、一・一、萬朝
　厳正なる意味における批評はむしろ振はず、建築論殊に議員建築論の盛なりしは

『新聞集成明治編年史』の索引からは、建築のみあり、造営・造家・築造などのことばはなかった。建築が一般化されていくといえる。

5.5 国語辞書における訳語

明治期国語辞書から建築関連見出し語を調べたて、次のような結果が得られた。

－　漢英対照いろは辞典(明治21＝1888)

けんちく(名)　―する(他)建築、造営、ふしん、しつらひ、たてきづくこと、たてきづく

Building, construction, to build, to construct

けんちくか(名)　建築家、とうりやう、いへたて、いへつくり　A builder, an architect

－　和漢雅俗いろは辞典(明治21~22＝1888~89)

ちくざう(する)(他)　築造、きづきつくる、たつる、建築(家牆等を)

けんちく(名)　―する(他)建築、造営、ふしん、しつらひ、たてきづくこと、たてきづく

けんちくか(名)　建築家、とうりやう、いへたて、いへつくり

－　言海(明治22~24＝1889~91)

けんちく(名)　建築　キヅキタツルコト。家屋、橋梁、城壁等ヲ作ルコト。普請。作事

－　増悌二版和漢雅俗いろは辞典(明治25~26＝1892~93)

けんちく(名)　―する(他)　建築、造営、ふしん、しつらひ、　たてきづくこと、たてきづく

－　日本大辞書(明治25~26＝1892~93)

けんちく(全平)名。　{建築}　漢語。築キ、建テルコト。すべて、建テ物ヲ。

＝ふしん。作事

－　日本大辞林(明治27＝1894)

けんちく　ナ。建築。ふしん。いへなどをたつるをいふ。

－　帝国大辞典(明治29＝1896)

けんちく　名詞　(建築)　建物などを築き、建つるをいふ。ふしん、作事などいふにおなじ。

－　ことばの泉(明治31＝1898)

けんちく　名　建築。家などをたてきづくこと。ふしん。作事。

「建築」はこの時期のすべての国語辞書に載っているが、「造家」は載っていない。

他には「造営・普請・作事」のような近世からのことばが載っていることが分かる。「建築」が一般化していたといえる。

6. 結論

本稿は、architecture概念が幕末・明治期にどのように受容されたかを、それにあてられた訳語を中心に考察してみたものである。

architectureということばは、1595年に宣教師たちによって出版された『羅葡日対訳辞書』に「すみかねのがくもん」とあり、江戸中期ごろに入って「家ヲ建テル術」「家ヲ造ル(術)」などに継がれ、一方では「築建」という造語も出る。江戸末期には、『英和対訳袖珍辞書』(1862)に「建築学」が、『仏語明要』(1864)に「造家術」が新しく登場し、他にも近世から使われていた「棟梁匠長(大工ノ)、匠長」もそのまま使われた。明治に入ってからもこの現象は続く。それが明治20年代以降からは、「建築」と「造家」二つに搾られていく。もちろん「造営(学)」など既存の建設行為を表す2字を用いたものもあるが用例は少なく、「造家(術)」はほとんど工学部関係のみに限られている傾向が見られた。さらに明治30年、東京大学の「造家学科」が「建築学科」に改称されてからは、architectureの訳語は「建築」に一本化されていくのである。

すなわち、architectureということばは、単に「建造物」や「建設」の意味ではなく、「そのための基礎的なもの」として理解され、その概念が「すみかねのがくもん」「家ヲ建テル(造ル)術」「造営・建築学(術)・造家学(術)」などに表され、最後は「建築」に決まったのである。今はアーキテクチャーという片仮名表記も使われれおり、部分的なことではあるが、アーキテクチャーには、その分野においての巨匠の意味としても理解されたりする。

今後は、architectureのみではなく、「build」「construct」も視野に入れて総合的に考察する必要がある。さらに建築とアーキテクチャーとの使い分けについても、これからの使用を観察する必要があると思う。

【参考文献】

菊池重郎(1958)「近世におけるARCHITECTUREの訳語について」『日本建築学会論文報告集』第50号
菊池重朗(1961)「明治初期におけるARCHITECTUREの訳語について(続)」『日本建築学会論文報告集』第67号
下中広(1990)『平凡社百科年鑑』平凡社
石井研堂(1997)『明治事物起原』築摩書房
金行信輔、倉方俊輔、清水重敦、山崎幹泰(1997)「「造家」から「建築」へ」―学命名・改名の顛末から―」『建築雑誌』112号
片野　博(2002)「品質概念からみた用語「建築」「造家」の相違」『日本建築学会計画系論文集』第554号

논문투고일 : 2013년 09월 10일
심사개시일 : 2013년 09월 20일
1차 수정일 : 2113년 10월 09일
2차 수정일 : 2013년 10월 16일
게재확정일 : 2013년 10월 21일

〈要旨〉

Architectureの訳語をめぐって

本稿は、architectureの概念に注目して、それが幕末・明治期にどのように受容されたかを、それに当てられた訳語を中心に考察したものである。その結果、次のことが明らかになった。

① 幕末に西洋建築が移入され、その中でarchitectureという概念も導入された。
② ‘諸芸を統括する原理、術’の意味を持つarchitectureは、1595年『羅葡日対訳辞書』に「すみかねのがくもん」と訳され、江戸中期頃に入って「家ヲ建テル術」「家ヲ造ル(術)」などに継がれ、一方では「築建」という造語も出る。
③ 江戸末期には、『英和対訳袖珍辞書』(1862)に「建築学」が、『仏語明要』(1864)に「造家術」が新しく登場し、近世から使われていた「棟梁トウリヤウ」もそのまま使われた。
④ 明治に入ってからもこの現象は続く。それが明治20年代以降からは、「建築」と「造家」2つに搾られていく。「造営(学)」など既存の建設行為を表す2字を用いたものもあるが用例は少なく、「造家(術)」はほとんど工学部関係のみに限られていく。
⑥ 明治30年に東京大学の「造家学科」が「建築学科」に改称されてからは、architectureの訳語は「建築」に一本化されていく。

すなわち、architectureということばは、単に「建造物」や「建設」の意味ではなく、「そのための基礎的なもの」として理解され、「すみかねのがくもん」「家ヲ建テル(造ル)術」「造営・建築学(術)・造家学(術)」などに表され、最後は「建築」に決まったのである。今はアーキテクチャーという片仮名表記も使われれおり、部分的なことではあるが、アーキテクチャーには、その分野の巨匠という意味としても理解されたりする。

Searching for a translated word for “architecture”

This paper focuses on the concept of architecture; how this word was accepted during the end of the Tokugawa shogunate to Meiji Restoration and which Japanese word was used. As a result, the following was made clear.

1. The concept of architecture was introduced along with the western construction.
2. The word architecture, the art of unifying accomplishment, was first translated in the book, Rapounitsitaiyakuzisho, in 1595 as a study of “sumikane.” During the mid Edo period, its definition has changed to the art of building a house and the art of making a house, which resembles the definition of the word construction.
3. The word “kentsikuhaku” in the book called A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language (1862) and the word “zoukadsutsu” in the book called Hutsugomeiyo (1864) appeared during the end of the Edo period.
4. The same pattern continues till the Meiji restoration. “Kentsiku” and ”zouka” began to be differentiated as two different words after 20 years of Meiji restoration.
5. Since Tokyo University changed its course name from “zouka engineering” to “kentsiku engineering” in Meiji 20th, the translated word for “architecture” has become “kentsiku.”

That is to say, architecture does not only mean building or construction. It also contains the basics required to build something, the art of building a house, and the study of Sumikane, which has finally become to be translated as “kentsiku.” Currently, the word architecture is used literally in Katakana along with “kentsiku.” Architecture in katakana retains a meaning of a master as well.